準備力で道を切り開く、元社会人野球選手の挑戦と転身



弓削田 智輝 氏（元野球選手）
Yugeta Tomoki

これまでのキャリア

●2012～2014　成田高校
●2015～2018　国士舘大学
●2019～2024　株式会社鷺宮製作所
●2025～　　株式会社 T-3

■徹底した準備力が生んだ“唯一無二”の強み

隣人が野球をしていたという縁で野球を始めた弓削田智輝さんは、社会人野球の強豪・鷺宮製作所で正捕手として 3 度の都市対抗野球出場に貢献した。身長 170 ㎝と、野球選手としては小柄ながら、「試合の準備」を徹底することで他の選手にない強みを作り出した。

対戦相手のビデオを繰り返し見て分析することは多くの選手が実践しているが、弓削田さんは3回見るという。1回目はキャッチャーの目線で、2回目はピッチャーの目線で、3回目は一般人の視線でと、毎回見るポイントを変えるそうだ。そんな徹底した「準備」が、競技生活を支えた。

■徹底した準備力が生んだ“唯一無二”の強み

現役時代に結婚し、子供もいた弓削田さんは、サラリーマンとして野球を仕事にして、満足のいく生活を送っていた。キャッチャーというポジションは希少で、チームから引退を勧告されることが少ないポジションだったが、不振に陥った3年目に「野球を65歳まで続けることはできない」と考えた。

鷺宮製作所は2月のキャンプから10月頃までは野球に専念できる恵まれた環境だったが、オフシーズンにしか社業ができないということの裏返しでもあった。

そんな中で、5年目で引退し、ビジネスパーソンとして生きるという明確なビジョンが頭の中に見えるようになっていった。

■ゼロから始める挑戦・野球人生で培った“人”との縁

ビジネスパーソンとして働く中で、「どの業種にもお金は絡むので、まずはお金の流れや仕組みを知りたかった」と金融業界を志すようになる。

しかし、情報も知識もなく、頼れたのはやはり“人”だった。野球で築き上げた人脈を武器に、多くの人と会い、会話をした。その中で出会った一人の人との縁がきっかけとなり、5年目のシーズンを終えて、2月に転職を果たした。

■野球で培った“チームを育てる力”を次世代へつなぐ挑戦

今は保険や不動産、証券と、様々な金融商品の総合的な代理店業務を担う弓削田さんには、将来的に「教育に携わる」という目標がある。「これまでキャッチャーとして、ピッチャーと共同作業をすることや、チームを育てていくことが仕事でした。だからゆくゆくは人を育てる仕事がしたい」と話す。現役生活の終盤はスカウティングや後輩の指導にも積極的に関わった弓削田さんらしい発想だ。

鷺宮製作所という大企業を飛び出したことについては、やはり反対も多かったという。しかし「長い人生、失敗しても成功するまで何度でもやり直せばいい」と、アスリートらしく挑戦を続ける姿勢を示す。

■現役アスリートへのメッセージ「やってみる！」を大切に！

最後に、現役アスリートへのメッセージをいただいた。

「行動力があれば、挑戦の数は無限に広がる。迷う前に一歩踏み出し、『やってみる！』という気持ちを大切にしてほしい。」

この言葉は、弓削田さん自身が大企業を飛び出し、自らの意思で新たな挑戦を選び取ってきたからこそ生まれたものだ。環境が変わった今もなお、挑戦を止めずに走り続けるその姿勢が、このメッセージに強い説得力を与えている。

弓削田さんの準備力と挑戦心は金融業界や、その先に描く「教育」でも大きな力となるだろう。

「選んだ道を正解にしていきたい」ソフトボール金メダリストが女子サッカーの GM に



三科 真澄 氏（元ソフトボール選手）
Mishina Masumi

これまでのキャリア

●1982 年　神奈川県茅ヶ崎市に生まれる
●2000 年　厚木商高から日立高崎入社　女子ソフトボール部入部
●2004 年　アテネオリンピック銅メダルを獲得
●2008 年 北京オリンピックで金メダルを獲得
●2010 年　前年限りで引退し、創部された東京国際大の監督に就任
●2015 年　創部 5 年目で全日本大学選手権初優勝に導く
●2018 年 日立高崎の後継チームであるビックカメラ高崎ビークイーンのコーチ就任。18 年、19 年と全日本総合選手権を連覇
●2020 年　コーチを辞め病気の母の農園を手伝う

●現在　2025 年から女子サッカーチームのザスパ群馬レディースの GM を務める

■悔しい銅メダル

野球好きだった父の影響で中学２年までは野球をしていた。1 番の自慢はプロ野球のオールスターで始球式をしたこと。打者はイチローさん、捕手は古田敦也さんという球界を代表する選手と大観衆の緊張に飲まれることもなく、投球はど真ん中。この光景は今も強く記憶に残っている。

中学２年の時に所属チームの活動が休止になったこともありソフトボールの世界へ。厚木商を経て日立高崎に入社。４年目の 2004 年にはアテネオリンピックに出場した。

だが金メダルが期待された中で銅メダル。三科さん自身も「全然打てないまま、あっという間に終わってしまいました」と悔しさを味わった。引退を考えたこともあったが周囲の説得もあり現役を続行。1 年間は代表活動を辞退して自チームの宇津木麗華監督ともに長打力向上に注力し、２年連続で日本リーグの本塁打王になるほどにまで成長し、2 回目のオリンピックとなる 2008 年の北京大会に臨んだ。

■使命を果たした金メダル

この大会を最後にソフトボールはオリンピックの実施競技からは外れることが決まっていた。

「(このままでは) 子どもたちがオリンピック選手になりたいという夢を持っていても、その夢を叶える場所がなくなってしまう。だからこそ、アメリカではなくてアジアの日本が金メダルを取ることが、(実施競技復活への) アピールに繋がる。そう思って“子供たちの夢をつなぐためにも勝とう”というのが、その時のメンバーの思いでした」

また、オリンピック経験者として後輩たちには「五輪への先入観を持たせないように、明るく、楽しく、やってきたことをやるようにしました」と振り返る。そんなベテランから若手までが一体となった日本代表は決勝でアメリカを破り、金メダルを獲得。三科さんは二塁手のポジションから歓喜の輪に飛び込んだ。

その喜びとともにアメリカ代表選手たちの振る舞いにも感銘を受けたという。

「(これまでのオリンピックで) ずっと勝ってきているアメリカが、負けてしまったのに、負けた相手に“一緒に写真を撮ろう”と言える。すごいなと思いました」

■母との最期の時間、高齢出産

2009 年、引退後すぐの 28 歳で東京国際大の監督に創部とともに就任。わずか 9 人の部員から始まったが、そこから５年で大学日本一という快挙を果たした。18 年と 19 年には日立高崎の後継チームであるビックカメラ高崎ビークイーンのコーチ就任し、ここでも全日本総合選手権を連覇。指導者として順調なキャリアを歩んでいた。

だが 2020 年、三科さんの姿は埼玉県の畑にあった。３年前から畑で農業をしていた母が病気で体調を崩していたからだ。

「18 歳で実業団に入った時に実家を離れて、引退後も監督コーチをしていたので“一緒に何かをや

れたらいいな”と思い、畑を手伝うようになりました。母の活力になるようにいろんなイベントも開催しました」

その年の末に母は亡くなったが、最期の時間を長く過ごすことができ、結婚の報告もできた。2022 年には 40 歳で第一子となる男の子を出産。かつてのトップアスリートとはいえ高齢出産は「つわりも酷かったし、出産も緊急手術による帝王切開でした」と振り返るように大変なものだったが、大きな幸せを手にした。

■サッカー界へ

ザスパ群馬レディースから GM 職の話が来たのは、それから約 2 年後。群馬県の太田市で「地域活性化を目指し、女性アスリートがもっともっと日の目を浴びて輝ける場所を提供しながら、地域から愛されるスポーツチームを作りたい」という熱意あるオファーをもらった。サッカーは未知の世界であったため最初は断ろうと思っていたというが、その理念に惹かれ入団を決めた。

「女子スポーツもそうですし、子供たちの環境も、“やりたいけどやれない環境がある”と耳にしたので、その環境作りに、微力でも手助けできればと思いました」

指導者人生と同じく、2024 年に設立されたばかりの真新しいチーム、環境でのスタートとなった。

■様々な経験を還元

仕事の幅は広く、スポンサー営業や行政とのやりとり、イベント運営、練習や試合の帯同などと幅広い。

現在 3 歳の子供の育児と仕事を両立。「寂しくさせてはいけない」と母としての息子との時間も大切にしながらも、大変といった感覚も無いそうで「本当に楽しいんです。頑張っている選手たちを見ると心を動かされます。使命や責任は感じるけど、仕事という感覚ではないほどです」と充実の日々を送る。

サッカーの専門的な知識は持っていないが、アスリートとして共通する気持ちの持ち方や準備は伝え、選手からの相談にも乗る。

「女性アスリートとして現役を 10 年、指導者 を 10 年やって、結婚や出産も経験したので、そのような点でも選手が求めていたら、伝えることができたらいいなと思います。また、生理不順など体の変化にも、ちょっとした助言ができればいいなと思いながら取り組んでいます」

チームは今季から群馬県 1 部リーグに昇格。今はまだフルタイムで本職の仕事をした後、夜に集まって練習をするスタイルだが、将来的には日本女子プロサッカーリーグ（リーグ名称：WE リーグ）への参入を目指している。そのための環境整備についても力を入れる。

「今の環境でもひたむきに練習に励んでいる姿が試合でも出ますし、本当に心を打たれますね。こうした姿がもっと伝われば、もっと多くの人に見てもらえるかなと思います」

常に精力的に動き続ける三科さん。

「現役を辞める時もコーチを辞める時も未練はまったくありませんでした。でも、どちらかというとネガティブな性格なので、後悔もたくさんある。その経験を忘れずに、今携わってくださる方に感謝しながら、選んだ道を正解にしたいんです」

　そう力強く話す姿からもわかるように、情熱と愛情を注ぎ続ける日々は、これからも続いていく。

SPORT CAREER SUPPORT CONSORTIUM
スポーツキャリアサポートコンソーシアム

スポーツを通じて健康と心の豊かさに貢献する存在に



西田 剛 氏（元サッカー選手）
Nishida Go

これまでのキャリア

●1986 年　鹿児島県に生まれる
●2009 年　横浜 FC で J リーグデビュー。その後、アビスパ福岡、愛媛 FC で FW として 13 年間プレーし、リーグ戦 301 試合出場 45 得点を挙げる
●2021 年　現役を引退
●現在　2023 年からは愛媛県伊予市で株式会社 SASAERU を設立。鹿児島県内の事業を進めながら現役時代で最も長い 8 年間を過ごした愛媛県内でスポーツを通じた地域活性化に取り組む（株式会社 SASAERU 代表取締役、一般社団法人 SASAERU 役員兼アンバサダー、一般社団法人 G-THLEAP 代表理事、株式会社日昇）

■カズさんから学んだ「プロフェッショナル」

鹿児島城西高校時代に全国高校サッカー選手権出場は果たせなかったものの、阪南大学での活躍が認められ2009年、横浜FCでプロサッカー選手のキャリアをスタートさせた西田さん。J2開幕戦でプロ初出場初ゴールをマークすると、ルーキーイヤーからストライカーとしてインパクトを残した。

その横浜FCには日本サッカー界のリビングレジェンド、「キング・カズ」こと三浦 知良選手が同じポジションに。西田さんはここで「プロフェッショナル」とはなんたるかを学んだ。

「カズさんからはプロとしての振る舞い、取り組み方、意識を体感させてもらいました。カズさんの他にも三浦 淳宏さん、大黒 将志さんといった元日本代表で結果を残した方々と過ごした時間はすごく学びになりましたし、こういう姿勢だからこそ長く活躍できるんだな。自分もこういう風になろうと思いました」

そして西田さんはその後、若き日に立てた誓いを体現することになる。

■サポーターに支えられ、支えた選手としてのキャリア

2012年にはアビスパ福岡へ移籍。加入早々のケガを乗り越え2年間で8ゴールを積み上げると、2014年には愛媛FCへ。2015年にはキャプテンとしてクラブ史上初となるJ1昇格プレーオフ進出も経験。後年はケガや病気に苦しめられながらも、不屈の闘志でゴール前へ迫り続けた西田さんはいつしか愛媛FCのレジェンド的存在になった。

「僕のリーグ戦キャリア最後のゴールは2019年J2・ホームでの大宮アルディージャ戦だったんですが、そのシーンやスタジアムの歓声は鮮明に覚えていますね」

ちなみに昨年は横浜FCの本拠地で挨拶する機会を、アビスパ福岡でもサポーター投票の結果、クラブ30周年OBレジェンドマッチのメンバーとして出場を果たした。「横浜FCからは長らく離れていたのにサポーターの前であいさつする機会を、アビスパ福岡でも2年間しか在籍していなかったのに、投票で選んで頂いた……。本当に心にしみました」

西田さんの残した足跡はそれぞれの場所で刻まれている。

加えて西田さんは、現役時代からピッチ外での活動にも力を入れていた。所属した3クラブすべてでクラブ応援番組のMCを担当。特に愛媛FCでは「自分のキャラクターを活かし、自分や愛媛FCを知ってもらう」ツールとして地元FM局で自らの名が付いた30分冠番組を毎週受け持っていた。

「街では選手としてではなく『ラジオでしゃべっている人』として声をかけてもらったこともありました。でも、それでよかったんです。そこから愛媛FCの試合を応援してもらう活動につなげられたんで。微力ながらも貢献できたと思います」

このようにスタジアムの声援を常にパワーに変えてきた西田さんは13年間のプロサッカー選手生活を全力で駆け抜け、2021年シーズンをもって現役を引退した。

■競技外の企業人との出会いが生んだ転機

その西田さんがセカンドキャリアを意識し始めたのは30歳を過ぎた辺りから。

「人生は一度きり。その時期に母を亡くしたこともあって、このままでいいのか、もっとサッカー

と違った世界を見てみたいと思いましたし、違う世界を見ることで新たな自分についても考えるようになりました」

サッカー界以外の人たちとの交流の積み重ねは、西田さんも想像していなかった運命を引き出すことに……。

現役引退後は、地元曽於市ではサッカースクール、鹿児島県内でU-12 、U-15 年代のサッカークラブ運営・指導へと舵を切った。新たな価値観を見出していた中で舞い込んだのは「愛媛FC 時代にお店で食事をしていた際、たまたまカウンターが隣になったきっかけで知り合うことができた」企業人からの愛媛県伊予市におけるスポーツコミッション立ち上げ事業の協力要請でした。

「本当に偶然のタイミングでした。僕が導いてもらった感じです」

かくして2023 年からは鹿児島県での事業と同時進行で伊予市でのスポーツコミッション事業に関わるようになった。それから3 年近くが経過した今。蒔いた種は大きく広がり、「ますます伊予市特命スポーツ大使」にも就任した西田さんは愛媛県伊予市に不可欠な存在となっている。

■現役選手へのメッセージ「練習外の時間が自らの選択肢を広げる」

そんな伊予市のスポーツ事業においては、元バスケットボール選手がバスケット教室の講師となり、愛媛県上島町出身で五輪3 大会連続出場の元やり投げ選手・村上幸史さんもイベントに参加している。

「まだ現実的には達成はできていませんが、アスリートのセカンドキャリア支援の一助になれればとは思っています。いずれはそれぞれのスポーツで昇りつめた方が指導されるような環境を整えたいですね」

その先に見据えるもの……。西田さんはさらに力を込める。

「自分の仕事が地域貢献になり、自分を必要としてくれる人たちと仕事をしながら豊かになり、自分自身も豊かになれればと思っています。僕はサッカーというスポーツを通じて成長させてもらったので、スポーツを通じて健康を心の豊かさに貢献することが僕自身の夢ですね」

最後に現役選手へのメッセージを寄せてもらった。

「現役選手は身体が資本とはいえ、選手活動以外で動ける時間はいっぱいある。僕自身もサッカー外のコミュニティと交流することで、サッカー界だけでは得られない刺激を得られましたし、自分がサッカー界から離れたところでの知名度という現実も知ることができました。どんどん外に出て行って、いろいろな人に逢うことで、自分の今おかれている立場が幸せであることを知り、その上で本職に励むと今現在のアスリートキャリアにもいい影響を与えますし、引退して次のステップに進む上でのヒントになると思います」

現役時代から他業種と積極的に交わり、そこで得た知見を現在フル活用している西田さんだから

こそ、「もっと選択肢があることを知ってほしいし、そこを感じ取る努力もしてほしい。若い時にそこに気付いた選手は相当凄いと思います」と強調した言葉は、いっそう説得力を持って伝わってくる。

オリンピックにあと一歩届かずもカーリングの魅力を伝え、自身の可能性も追求する日々







市川 美余 氏（元カーリング選手）
Ichikawa Miyo

これまでのキャリア

●1989 年　長野県軽井沢町に生まれる
●1996 年　カーリングを始める
●2005 年　日本ジュニアカーリング選手権優勝
●2008 年 中部電力に入社
●2013 年　日本代表決定戦で敗れソチオリンピック出場を逃す
●2014 年　日本選手権 4 連覇を達成。この年に引退
●現在　解説者として活躍

■母に連れられ出会ったカーリング

2月6日に開幕し熱気を帯びるミラノコルティナオリンピック。今や冬季オリンピックの人気競技ともなったカーリングで、スタジオ解説者やワイドショーのゲストとして人気を博しているのが市川美余さんだ。中部電力カーリング部時代に日本選手権4連覇という偉業を果たしながらも、目標としていたオリンピックにはあと一歩届かず引退。だが、今も充実の日々を過ごし、さらなる夢も描いている。

市川さんがカーリングと出会ったのは小学生の頃。生まれ育った長野県軽井沢町がカーリング競技の実施会場となったことで、母が先にカーリングを始め、それについていくうちに、気づけばストーンやブラシを握っていた。当初は「情熱的にというよりは母についていくくらいの気持ちでした」と振り返るが、中学3年の頃には日本ジュニアカーリング選手権を制した。
高校進学とともに優勝した際のチームは解散。軽井沢高に進学してからは、チームには所属せず普段はアルバイトをしており、冬になると助っ人要員で呼ばれ様々なチームに加わった。
「この時期が楽しかったですね。チームによって戦い方や過ごし方が違って面白かったです」
高校で競技は辞めて進学しようと考えていたが、市川さんに大きな転機が訪れる。

■日本選手権４連覇、その先にあった届かなかった五輪

中部電力がソチオリンピックを目指して長野支社にカーリング部を立ち上げるにあたり、地元の市川さんに声がかかった。
「2・3回は断ったんです。進学して体のこととか英語を学びたいと思っていて。でも母に相談したら“あんたのやりたいことってカーリングやりながらでも、できるんじゃないの？”と言われて、“そうかもな”と思ってチャレンジすることになりました」
地元出身者たちでチームを結成し、発足当初は「チーム青森なども強くて壁になりました」と振り返るが、そこにジュニア世代での活躍が著しかった北海道出身の藤澤五月選手（現ロコ・ソラーレ）が加わり、チームは瞬く間に力をつけていく。2011年に日本選手権を初優勝すると、連覇はそこから4年続いた。
それでも、2位以内に入らなければオリンピック出場が絶たれる2012年のパシフィックアジア選手権は大きなプレッシャーがあり「毎晩、夢の中にカーリングが出てきて勝ったり負けたりしていました」と振り返る。ここでなんとか日本の出場枠確保は果たしたが、大一番となる2013年の世界最終予選代表決定戦では北海道銀行フォルティウスに敗れ、オリンピック出場の夢は絶たれた。
「初挑戦の若い私たちに対して、ベテラン中心の層の厚いチームに経験値の差で負けてしまいました」

「でも、当時できることはすべてやれたと思います」と話すように、攻撃的なカーリングを目指し、日々ハードなトレーニングをしていたため、すぐに「もう1回4年後に」という気持ちにはなれなかった。4連覇を果たした日本選手権を最後に、引退を決めた。

「ソチオリンピックを最終目標のように捉えていたので、オリンピックに行けても行けなくても辞めるつもりでした。“ここから先は会社のためにではなく自分のためにやってほしい”とも言って

もらえたのですが、自分のためにもうあんなに頑張れないなと思いました」

■すべての経験が“今”の力に

　引退後に結婚し、２人の子育てもしながら働いている。解説者業も板についているように見えるが「結構感覚でやってきたので言語化とか難しいです。今も大丈夫かな？と思いますし緊張します」と謙虚に語る。滑舌を良くするためにトレーニングをしたり、読書をして理論立てて話したりするように訓練したという。
また、社業の経験も今に活きている。成績の上昇とともに徐々に軽減されていったというが、チーム発足当初はフルタイムで勤務。終業後に帰宅してから練習というスケジュールだったが「社会人経験はやっぱり大事でしたね」と振り返る。
「検針業務の部署にいたので、検針員さんやメーカー機器の管理をしていました。体力的には大変でしたが、今となれば仕事もカーリングも組織で動いていることを学べたのは、とても良い経験でした。私は今フリーで活動していますが、どんな仕事でもいろんな人がサポートしていることがわかったので、今に活きています」

そして、高みを目指した日々はかけがえのない財産だ。
「オリンピックでのメダルを獲得するために、筋力に加えメンタルトレーニングも力を入れていましたし、カーリング選手に必要な人としての器の大きさをどう大きくするかの試行錯誤をしていました。その経験から何事も多角的に様々なアプローチをすることの大切さを実感しています。また、子育てが落ち着いたらピラティスのインストラクターも再開して、アスリートを支えることもしてみたい。これも現役時代の経験からつながっていると思います」

カーリングの魅力を伝える活動に加え、自身の可能性もさらに追い求めている姿は現役時代に負けない輝きを放っている。

「野球は学びの宝庫」ビジネスでも第一線で活躍をつづける銅メダリスト



坂口 裕之 氏（元野球選手）
Sakaguchi Hiroyuki

これまでのキャリア

●1965 年　宮崎県都城市に生まれる
●1983 年　宮崎県立高鍋高校 3 年時に夏の甲子園出場
●1984 年　明治大学に入学。東京六大学野球で 2 度の優勝を経験。4 年時には主将を務める
●1988 年　日本石油（現 ENEOS）に入社
●1991 年 主将に就任。同年秋に日本選手権優勝、93 年にも都市対抗優勝を果たす
●1992 年　バルセロナオリンピックに出場。銅メダル獲得に貢献
●1994 年　現役引退。2000 年 8 月まで監督を務める
●現在　ネクサスエナジー株式会社代表取締役副社長、日本野球連盟アスリート委員会委員長、NHK 高校野球中継解説者

■フィールドから営業の最前線へ

野球はマネジメントを学ぶ最高のスポーツだと思っています。

そう語るのは、社会人野球の名門・日本石油（現 ENEOS）で外野手・監督として活躍した、坂口裕之さんだ。坂口さんは 1992 年のバルセロナオリンピックに出場。8 試合に出場し打率.292 を記録し、伊藤智仁（元ヤクルト投手／現投手コーディネーター）、小久保裕紀（元ソフトバンクほか内野手／現在監督）らとともに、銅メダル獲得の原動力となった。引退後は企業人としてキャリアを重ね、現在は全国に 150 以上のサービスステーション（ガソリンスタンド）を展開するネクサスエナジー株式会社の副社長を務めている。

明治大学卒業後、日本石油に入社。23 歳から 7 年間プレーし 29 歳で引退。その後、社業に就きながら、31 歳という若さで監督を務めた。

「会社が先々のことを考えてくれたんだと思います。若くして監督を経験できたことは、本当に大きかったですね」

社会人野球で 30 代前半の監督は決して多くない。名門チームでの指揮経験は、その後の活動の幅を大きく広げることになる。

35 歳で本格的に社業へ。営業職として仕事と向き合う日々が始まった。

■野球で磨いた“役割を見つける力”が、仕事を支える

「まずは仕事。責任ある仕事をやり遂げないと、サポートは得られません」

野球一筋だった分、業務知識では同期に遅れを取る部分もあった。しかし、そこで生きたのは、自らが「学びの宝庫」と話す野球の中で学んだ“役割を見つける力”だった。

「野球でも仕事でも同じ。自分に期待されている役割は何か、それを見つけて全うすること」と説く。

野球は、試合の中で常に状況を読み、判断を下すスポーツだ。

・サインをどう読むか
・流れをどう変えるか
・投手交代のタイミング
・チーム全体をどう機能させるか

「ゲームマネジメントは、まさに仕事そのもの。野球は学びの宝庫です。あれだけ多くのサインがあって、流れも二転三転する。この中で感じ取っていけるものがある。これらを選手・監督として多く学びました」

営業の現場でも、お客様が何を求めているかを考え、状況を見極める。最終的に行き着くのは「人と人」の関係だという。

「仕事の中身は、毎回、毎年のように変わるし、会社が求める目標も変わってくる。それを私なりにうまく理解し、実行に移すことができたのかなと思います」

会社には野球部出身の選手たちが職場で活躍する風土もあり、仕事そのものや仕事の向き合い方の助言をもらえる土壌もあったことにも感謝する。

■同じ舞台へ、選手から支える側へ

仕事に真摯に向き合うからこそ、野球の活動も継続的にすることができた。2006年からNHKの高校野球の解説者としても活躍。選手の思いに寄り添った解説は多くの高校野球ファンの支持を受けているが、彼の活躍は解説にとどまらない。

2003年のIBAFワールドカップの日本代表コーチを務めたことを皮切りに複数回代表コーチを務め、日本野球連盟のアスリート委員として社会人野球全体のレベルアップや日本代表の強化に携わってきた。

今年の9月にはアジア競技大会（愛知県で開催）を控え、トッププロ選手が集まる韓国や台湾を倒しての金メダル獲得を目指す侍ジャパン社会人野球代表の挑戦を、アスリート委員会委員長としてバックアップする。

2019年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会に出向。野球とソフトボールのVGM（ベニューゼネラルマネージャー）を務めた。かつては選手として出場した舞台を運営の責任者として支える側に回った。

コロナ禍での開催という未曾有の状況で、IOC（国際オリンピック委員会）との調整、自治体との連携、危機管理。難題を数えればきりがないが、それをチームとして乗り越え、成功に導いた。野球で学んだマネジメント能力はここでも遺憾なく発揮された。

「選手と運営の両方を経験させてもらったことは、こんな幸せなことはありません。支える人たちがいるから大会が成り立つんだということを、あらためて学ぶことができました」と感慨深く振り返る。

■現役選手へ贈るメッセージ「競技の先にも続く“人としての力”」

オリンピックとパラリンピックを終えた2021年からネクサスエナジーに出向。販売本部長を経て2023年6月から副社長に昇格した。

「全国に支店があって、その支店の運営を担う方に対してどのような声をかけてあげるか、施策を出せるのか。その中で、どれだけモチベーションを上げさせられるか、やりがいを持たせられるか。これは野球と一緒だと僕は思っています」

エネルギー事情も変わってきている昨今、次代に向けて将来を見据えた手を打っていきたいとも考えている。

最後に現役アスリートのセカンドキャリアに対する思いを聞いた。

「今は野球のことだけで精一杯かもしれません。でも、そこで身につけた力は必ず将来につながります。競技と同じくらい、“人としてどうあるか”を大事にしてほしい。会社でも社会でも、最も重要なのは人と人なんです」

組織が目標を果たすために率先して動き、周囲の人の心を動かし、組織とともに自らも成長を遂

げていく。野球を通して学んだものを社会に還元しつづける坂口さんの姿は、アスリートが持つ可能性やスポーツから育まれる社会性の素晴らしさを強く証明している。

ボクシングもパン作りもストイックに、真摯に



これまでのキャリア

●1972 年　埼玉県に生まれる
●1991 年　ヨネクラボクシングジムに入門
●1992 年　トーナメントを勝ち抜き東日本スーパーフライ級新人王
●1996 年　現役を引退
●2008 年 10 年超の修行の末、江戸川区葛西に『boulangerie JOE （ブーランジェリー・ジョー)』を開店
●現在　変わらず人気店として繁盛を続けている

■『あしたのジョー』に憧れた少年が、リングを目指した日

葛西駅から南に歩いて約 20 分、バスを使えば 10 分ほどの場所に佇む『boulangerie JOE （ブーランジェリー・ジョー)』。開店から 18 年を迎えた今も、変わらず街の人々に愛され続けている人気店だ。

さほど広くはない店舗だが、客足が途切れることはない。目の前の窯からは焼きたてのパンが次々と取り出され、すぐに店頭へと並べられていく。一口頬張れば、小麦の豊かな風味が口いっぱいに広がる。

そんなパンを誠心誠意作り続けているのが、店主の間々田雄一さん。パンはすべて手づくりにこだわり、定休日の月曜日から水曜日までは仕込みに専念するストイックな日々を過ごしている。そんな間々田さんは、実は元プロボクサーという異色の経歴の持ち主だ。

幼い頃に再放送で観た『あしたのジョー』をきっかけに興味を持ったボクシング。店名の“ジョー”もここに由来する。
さらに、ジャッキー・チェンやブルース・リーといったアクションスターにも憧れていた。
進学先の埼玉県立大宮高校では空手部に所属。埼玉指折りの進学校であるが、目的はただ一つ、空手に打ち込むことだった。
「ここなら親も先生も納得してくれるかな、と思っていました。なので当時は、空手しかしたくありませんでした」
そう語る通り、一心不乱に空手に打ち込む日々を送った。

高校卒業を目前に進路を考える頃、周りは当然大学に進む者ばかりだったが、テレビでたまたま見た鬼塚勝也（元 WBA 世界スーパーフライ級王者）に衝撃を受ける。
「強いしかっこいいし、リアルな“ジョー”だ」と、自らもプロボクサーを目指す決意が固まった。
空手では、2 年生の時に県 3 位、3 年生の時には 2 位とインターハイや国体にはあと一歩届かなかったが、関東大会には進み、県の強化指定選手になるほどの実力をつけていた。

■駆け上がった先にあった、もう一つの壁

いくつかのジムを見学した中で、決意した間々田さんが門を叩いたのはヨネクラボクシングジム。
「大橋秀行さん（元世界王者／現在は井上尚弥らが所属する大橋ボクシングジム会長）をはじめ、強い選手がたくさんいて活気もあり、ココだ！と思って決めました」
空手の癖が抜けず、ガードが下がってしまうなどの苦労の連続。また、当時隆盛を誇り多くの練習生がいたジムの中、「まずは目をかけてもらうところからでした」と振り返るように、必死に地道な練習を積み重ねていった。その結果、スーパーフライ級の東日本新人王にまで上り詰める。

だが、そこから先が遠かった。

「新人王を獲って合宿にも連れて行ってもらえるようになりました。でも、空手でもそうだったのですが、上位まで行ってもそこから勝ちきれず、全日本新人王にはなれませんでした。B 級トーナメントや、A 級に昇格してからのトーナメントでも負けてしまいました」
日本ランキング上位に入ったこともあったが、当時の王者をはじめ、上位選手が同門に揃っていたため、なかなかタイトルマッチの機会には恵まれなかった。そんな中でフィリピン人選手に敗れ、再起戦も黒星。24 歳でグローブを置く決断を下した。

■「好きなことなら本気で頑張れる」という想いがパン職人への道を切り開いた

引退後、これから何をしようかと考えた時、ふと幼い頃の記憶が蘇った。
「子どもの頃、近所のパン屋さんが夕方になると焼きたてのパンを届けてくれるサービスがあったんです。それが本当に美味しくて、チャイムが鳴った瞬間に“美味しいパン屋さんが来た！”と玄関へ走って、兄弟で奪い合って食べていました」
その記憶とともに、「好きなことなら本気で頑張れる」という思いが芽生え、パン職人としての修行を始めることにした。

修行場に選んだのは、高級ホテルや地域で名の知れた有名なパン屋。
だが、いざ足を踏み入れてみると、現実は想像とはまったく別物の世界だった。
「のんびりした仕事かと思っていたら、実際は秒単位で動いて焼くという仕事だったんです。仕事の内容で辞めたいと思ったことはなかったのですが、ホテルでは朝から晩までずっと地下で働く生活だったのが辛かったですね」
それでも自分の店を持つという夢を胸に、約5年でホテルを離れ、今度は地域を代表する人気店へと修行の場を移した。
「ホテルのパンは種類が少なく、しかも伝統的な製法であんパンすら作ったこともなかったので、また違う世界でした」と、ここでも様々な学びを得たと言う。

■想いを形にした開店、そして進化し続ける店へ

そして2008年、間々田さんは念願の独立を果たし、『boulangerie JOE （ブーランジェリー・ジョー)』を開店する。
「18年前の葛西にはオシャレなパン屋はなかったので、外観や内装はそういうものを目指しました。一方で、下町には老若男女いらっしゃるので、敷居の高くないアットホームな雰囲気も目指しました」
開店から年月を重ねた今も、初心は忘れない。人気店であり続ける理由は、パンとお客さんへの真っ直ぐな愛情にある。
「オープンの時からずっと思ってやっているのは、とにかく正直に、一生懸命美味しいパンをお客さんに届けようという気持ちで作る。お客さんに応援してもらえる店にしなければいけないということです」
「楽しくないと絶対に続かない。作ったことのないパンを作れると嬉しいですよね。マンネリにならないことはお客さんにとっても良いこと。定番のものでも少しずつ改良しているものもあります」
誠実さと挑戦。その積み重ねが、18年続く人気店を支えている。

■現役アスリートへのメッセージ「情熱は競技の先にも続いていく」

現役アスリートへのメッセージをお願いすると、間々田さんは競技人生と今の仕事を重ねながら、やりがいを持つことの大切さを語ってくれた。
「好きなことなら頑張れる人間は多いと思います。僕の場合は、ボクシングの現役時代と同じくらいの情熱を持ち、今はパンを作ることに打ち込むことができています」

多忙な日々ではあるが、「ボクシングをやっていてよかったのは、体力が人の何倍もあって集中力も高いことですね。だからこそ、今もストイックに打ち込めます」と過去の経験も踏まえ、明るく笑う。
そして何よりの原動力は、お客さんの声だという。
「美味しかったという反応をいただけることは、現役時代の歓声をいただくことと同じ喜びがあります」
リングに注いだ情熱は、今も形を変えて燃え続けている。その炎が、今日も一つひとつのパンに込められている。

2000 年シドニーオリンピック銅メダリストが 「水上での命を守るために」取り組むこと



これまでのキャリア

●1979 年　徳島県徳島市に生まれる
●1996 年　徳島県立城南高校 2 年時に 50m 自由形など 3 種目でアトランタオリンピック出場
●2000 年　中央大学 3 年時にシドニーオリンピック出場。女子 4×100m メドレーリレー銅メダル
●2002 年 大学卒業後に就職後、徳島市に戻りスイミングスクールでの指導などにあたる
●2011 年　ベーシック・サーフ・ライフセーバー資格を取得
●2012 年　「徳島ライフセービングクラブ」を創設
●現在　　SUP スクール運営をはじめ、一般社団法人徳島県水泳連盟理事、日本サッカー協会心のプロジェクト「夢先生」講師など「スポーツ系自由人」として活動中

■「自分の意思ではなかった」競泳でつかみとった銅メダル

「小学校入学時は泳げなかったので、そこで両親が泳げるようにと、近くにできたスイミングスクールに放り込まれたんです。自分としては姉がやっているバレーボールをやりたかったし、水泳は好きではありませんでした。しかし辞める選択肢も、辞める勇気もなかったんです」

2000 年のオーストラリア・シドニーオリンピックの女子 4×100m メドレーリレーで日本チームの銅メダル獲得に貢献した源さんが水泳を続けてきた理由は、世間から見れば意外ともいえるものだった。

そんな自分の意思と反して始めた競技だったにもかかわらず、小中学校では順調に成績が伸び、1994 年の日本選手権では 50m 自由形で当時の日本記録を樹立。徳島県立城南高校でも充実した学生生活の中「ベストタイムは一度も出なかった」ものの、2 年生の時にアトランタオリンピックに出場。3 年生の時には日本選手権で再び優勝した。小さいころから「オリンピックで金メダルを獲りたい」という目標を掲げていた源さんの元には、当然数多くの大学からオファーが舞い込む。

その中で「私たちと一緒にがんばろう」と声をかけてくれたのは中央大学。

源さんはそこで「はじめて自分の意思で」進学先を決断した。

「小さい頃は周りのサポートを得て、わき目も振らずやってきた。今になってみればそれも大きな経験だったんですが、進学先を決めるにあたって譲れなかったのは『スポーツ以外のことを学び、スポーツ以外の人間関係を築きたい』だったんです」

選択したのは法曹界にも数多くの人材を輩出している法学部。ここで「自分のフィールド以外の皆さんが応援してくれる」人間関係を感じられたこともあり、「やらされる」から「やる」へ取り組みが進化した源さんは、2000 年のシドニーオリンピックでは心身ともに充実した状態で迎えることに。

個人種目では 50m で 8 位、100m で 7 位といずれもファイナリストとなり入賞。そして前回大会予選落ちのリベンジを期して「4 人それぞれが最高のパフォーマンスをして絶対にメダルを獲得する」という誓いを立てて迎えた 100m×4 メドレーリレー決勝で、源さんは最終泳者の重責を担った。

「第 1 泳者の中村真衣（背泳ぎ）が設定タイムに届かなかったんです。そこで抱擁しながら私にかけた言葉が『ごめん。頑張って』。その後、第 3 泳者の大西順子さん（バタフライ）がいいタイムを出して 3 位・4 位を競り合う場面で帰ってくるのを見たら、逃げたしたくなって思わず後ろを振り返ったんです。そうしたら中村真衣、第 2 泳者の田中雅美（平泳ぎ）が祈るような顔をして私を見ている。ここで『やるしかない』となって。すごくアドレナリンが出ていた中で、コーチからずっと言われていた『前半抑えて後半勝負』を実践できたのが、最後の 5m でドイツを逆転できたことにつながりました」

夢の金メダルには手が届かずとも「苦しくても苦しくても乗り越える」心を鍛えた結果は、日本女子水泳界で初となるメドレーリレーでの銅メダル獲得となったのである。

■「自分とは何者なのか」を超え、「水上の命を守る存在になる」仕事へ

ただ、シドニーオリンピック後は「私より頑張っている人たちはいっぱいいる。それに比べたら自分なんか」という自己否定感が増幅。同時に大学進学時に希望していた水泳外の世界で活躍したい想いも重なり、大学卒業後、源さんは一度プールから離れ、一般社会へと踏み出すことになる、

「ただあまりにも水泳しかしていなかったので……。社会人になってみて、オリンピックを目指していた水泳のような明確な目標がなくなって、『自分は何者なのか。何がしたいのか』に 20 代の間は苦しみました。今振り返れば自分の武器を持てばよかったんですが、考え込みすぎて、そんな行動にも動けなかったんです」

それでも周囲からは「オリンピック銅メダリスト」の肩書が付いて回る。故郷・徳島市に戻り、スイミングスクールのコーチとして再び水泳に携わりながらも「周りの目も怖くなった」模索の時間は 30 代を迎える手前まで続いた。

そこで源さんは、過去の経歴にとらわれず、まず行動に打って出る。公私関わらず様々なことに関わる中、32 歳で次なる人生の選択肢として見つけたのは「ライフセービング」の世界だった。
「徳島県内で開催されているオープンウォーター（屋外）の水泳大会によく参加していたんですが、そこでライフセーバーの方と出会う機会があったんです」

そこで言われたのはこんな言葉だった。「あなたは泳ぐことはできるけど、人を助けることはできないでしょ？」
「そうだなと思いました。でも逆に考えれば『泳ぐことができれば、人を助けることはできるんだ』と。さらに別の現場に行ってもライフセーバーはかっこよく見えた。そこで岡山県内でのライフセービング資格講習会に参加することにしたんです」

ちょうどその時期、源さんがライフワークの 1 つにしているサッカー界で衝撃的な出来事が起こる。日本代表として 2002 年 W 杯でも躍動した DF 松田直樹の心筋梗塞による急逝。そこで自分が培ってきた水泳を活かして水上で「命を救う活動」を地元・徳島で行う決意を新たにした。

かくして 2012 年、源さんは「徳島ライフセービングクラブ」を創設し、県内でのライフセービング活動に従事。次世代にクラブを託した現在は、ボードの上に立ちパドルで漕ぐウォータースポーツである SUP（スタンドアップパドルボード）のスクール運営活動や、インストラクター養成活動などを通じ、水難事故の予防に寄与している。

■現役アスリートへのメッセージ「人生は競技者でない時間の方が長い」

現役アスリートへのメッセージを求めると源さんはこう答える。
「はたから見たら『アスリート時代が人生のピークだろ』と言われることは多いし、自分自身もそう感じてしまうこともあると思うんです。でも一部の例外を除けば、人生は競技者でいる時間よりも競技者でない時間の方が長い」

「私も 20 代の時は苦しみましたが、ずっと『君は本物だし凄いことをやってきたんだよ』と言っ

てくれていた夫の助けもあって、40 代になって自分に自信が持てるようになってきました。今振り返れば当時は変なプライドが自分を邪魔していたんだと思っています」

最後は「競技の種目やレベルとかは関係なく、今頑張れていることが素晴らしい。一番を達成できることは大切なことだけど、思い通りにいかなくても想い描いたことに対してプロセスを踏むこと。そこに価値を見出してほしい。今最大限頑張っていることはセカンドキャリアにも必ず活きてくると思います」と、現役アスリートへのエールを送った源さん。

自身が抱く将来の夢を尋ねると、しばらく考えた後「やりたいことをやれる人生でありたい」と返答した源さんはさらに言葉を紡ぐ。

「時代や年齢によってできることや選択肢は変わってくるとは思うのですが、その時々に自分ができるようにしたいです」

セカンドキャリアというより、日々キャリアを更新していく源さんらしい充実した表情がそこにはあった。その瞳は自らの現役時代よりいっそう輝いている。

「アスリート経験」が基盤になっている今の自分



山脇 典子 氏（元女子サッカー選手）
Yamawaki Noriko

これまでのキャリア

●1987 年　香川県丸亀市に生まれる
●2004 年　兵庫・日ノ本学園で快速アタッカーとして活躍
●2009 年　大阪体育大 4 年時に第 25 回夏季ユニバーシアード（セルビア・ベオグラード開催）大会で女子サッカー競技日本代表入り。銀メダル獲得
●2010 年 サッカー選手を退き大阪府内で福祉支援員と小学校チームのコーチを務める
●2012 年　地元に戻り、中学生女子クラブサッカーチームの監督などを務める
●2013 年　AO 試験で丸亀市役所職員に採用される
●2016 年　スポーツ推進課ホームタウン推進室で「丸亀なでしこスマイル☆サッカー交流大会」の創設に尽力
●現在　　2022 年度より丸亀市役所市民課に勤務中

■日ノ本学園で学んだ「チームビルディング」

小学校1年生から男の子たちに混じって丸亀城南サッカースポーツ少年団でプレーしていた山脇さん。地域選抜チームでキャプテンを務めるなど、才能は当時から折り紙つきだった。丸亀南中では一度は陸上部に入るも2年生からは再びサッカー部でプレーする傍ら、屋島ボニータで大人に混じり女子サッカーをプレー。屋島ボニータに先輩がいた縁で高校女子サッカーの名門・日ノ本学園に越境入学する。

「これまで自分が一番うまかった」山脇さんだったが、ここで大きな挫折を味わうことに。レギュラーをつかむのは最上級生になってからとなったが、それは同時に人間的成長を促す期間でもあった。

「当時、サッカー部監督だった上嶋明先生（現・学園事務局長）に人格、人間性を変えてもらいました。サッカー選手である前に1人の人間であり、1人の学生であり、授業をしっかり受ける。宿題も出す。やるべきことをやらず、ルールを守らないで、どうしてサッカーができるのか。気付いたらすぐ動く。動かなかったら気付いていないのと一緒。チャンスを自ら見逃さない。そこから始まって様々なことを学びました。それは今になっても活きています。困っている人がいたら『どうして困っているんだろう』と考えますね」

ピッチ内での教えも数多く現在の仕事に活かされている。
「私が今仕事をしている市役所内の業務では、職員の皆さんを仕事の歯車が回るようにどう配置するかも大事になるのですが、実はそこはサッカーでやってきた観察力や洞察力が活きる部分。明確な目標に対してのチームビルディングはサッカーも今の仕事も同じですね」

かくしてサッカー選手として、そして人間としての基盤を築いた山脇さんは大阪体育大へ進学。現実的に描いていた夢でもあった、当時日本女子サッカー界の国内トップクラスだった「TASAKIペルーレ」でのプレーを目指し、さらなる研鑽を積むことになる。

■目指していた夢が消え、サッカー選手から新たな道へ

山脇さんは「監督の求められていることが理解できた」コミュニケーション能力の高さと快足を利して大阪体育大でのキャリアも順調に推移させる。1年時にはスーパーサブとして決勝で国立競技場のピッチに立ち、全日本女子サッカー選手権大会優勝に貢献すると、2年時も同大会準優勝。4年時には関西地区から唯一、セルビア・ベオグラードで開催された第25回ユニバーシアード競技大会の女子サッカー日本代表に選出され、銀メダルを獲得した。

当然、周囲の期待は日本女子サッカー界最高峰・Lリーグでの活躍。ただ「山内典子」の名は大阪体育大卒業後、サッカー界から突然消える。その理由は……。
「自分はユニバーシアード代表で一番下手でしたし、活躍もできなかった。そこで『なでしこジャパン』を目指すことは無理だと感じましたし、2008年にはTASAKIペルーレも廃部になったんです。そこで先が見えなくなりました」

複数のＬリーグチームからオファーがかかるも「自分の稼ぎでサッカーができるとは思えない」ときっぱり選手生活を諦めた山脇さんは、「サッカーをしていない山内典子は、世間から認められるのだろうか」と悩みつつも大阪府内で偶然にも募集がかかっていた福祉支援員と小学校サッカーチームのコーチとして新たなスタートを切る。

約2年後には香川県内で新規に立ち上がった中学生女子クラブサッカーチームの監督オファーを受け地元に帰還。ただ体調を崩し数ヶ月で退職した後は、丸亀市内の福祉事業団で勤務していた山脇さんに母親がこう声をかけた。

「丸亀市役所がAO試験で職員を募集しとるで」
実績十分の山脇さんは3人の合格者に名を連ねることに。こうして2013年4月、丸亀市職員としての日常がスタートした。

■サッカーの「逆算思考」を市政に活かす

採用後すぐスポーツ推進課ホームタウン推進室に配属された山脇さん。ここで、J2に昇格したカマタマーレ讃岐のホームタウン丸亀市とアウェイサポーターをつなぐPR活動や、少女サッカー大会「丸亀なでしこスマイル☆サッカー交流大会」の立ち上げに携わる。

「当時室長だった村尾剛志さん（現・丸亀市まなび文化課課長）に引っ張って頂いて、自分のやりたいことをやらせてもらいました。丸亀なでしこスマイル☆サッカー交流大会の立ち上げについても『明治時代に丸亀市内で女性がサッカーをしていたように、いきいきとしていることをアピールしたいんだよ』と励ましてもらったのはありがたかったです。
そして、地元の友達はじめ、皆さんにも協力してもらいました。スポーツの輪がつながっていく力を感じましたし、そこに裏方として関われることが嬉しかった。サッカーのように目標達成というゴールからの逆算で考え、大会を成功させることが楽しかったです」

2022年4月に異動した市民課での活動4年目。結婚し3人の子どもにも恵まれた私生活含め「本当に人に恵まれています」と話す山脇さん。「子どもを育てるにもスポーツ栄養学とかが役に立っています」と笑う表情は、すっかりわが子を慈しむ一主婦のそれだった。

■現役アスリートへのメッセージ「その経験は、きっと誰かを支える力になる」

最後に山脇さんに現役アスリートへのアドバイスをお願いすると「自分はユニバーシアード代表で自分の限界を知ったし、やりきった感がある。だからトップアスリートではないですよ」と注釈を付けた上で、こんな日々の逸話を披露してくれた。

「何の仕事をしてもアスリート経験は役に立つんです。子どもがスポーツに関わってくれたらそれも成功ですし……。そういえばこの前、一番下の子と一緒に丸亀市民球場まで遠足に行った時、一緒に行った男の子とボールを蹴って『うまいやん』と言ったら、しばらくしたら男の子の親から連絡があって。

『あの日サッカーをしてからサッカーが大好きになって、サッカー教室に通うようになったんです。サッカーをするきっかけを与えてもらってありがとうございました』と言われたんですよね。だから、どんな道に行ったとしてもアスリートになって活かせることはあると思いますよ」

将来の夢は「子どもが育ってくれて、夫婦健康で老後を幸せに暮らす」と現役時代さながらのアグレッシブな発言で締めた山脇さん。アスリート時代に培った基盤は、今も確かに彼女のDNAとなっている。

「1番になりたい」から「みんなが楽しい」へ 元競輪女王の意外な転身



高木 真備 氏（元競輪選手）
Takagi Makibi

これまでのキャリア

●1994年　岡山県真備町（現倉敷市）に生まれる
●2013年　日本競輪学校（現日本競輪選手養成所）に入学
●2014年　ガールズケイリン選手としてデビュー
●2021年　ガールズグランプリで初優勝。年間獲得賞金2603万6千円で賞金女王となる
●2022年 4月に現役引退を発表
●現在　解説などの競輪関連の仕事に加え、犬猫保護活動、自立支援型ホーム運営を行う

■頂点を目指し、走り出した日々

幼少期は岡山県真備町（まびちょう／現倉敷市）に生まれ、その地の偉人である吉備真備（き

び・まきび）にちなんで、まきびと名付けられた。自然豊かな環境で身体能力を育み、小学５年からは東京都町田市へ。中学入学時からハンドボールを始め、東京都選抜でジュニアオリンピック３位に入る活躍を見せたが、文化学園大杉並高校時代は２・３年時に全国大会出場を逃すなど、思うような活躍はできなかった。

そこで競輪選手になることを決めた。
「何かの世界で１番になりたいという思いがずっとあって、ハンドボールを始めたのも、中学校の部活で一番強かったから。でも高校で目立った成績を残せず限界を感じました。競輪を選んだのは、個人競技にも興味がありましたし、他競技から転向してきた選手が活躍することも多いところに惹かれました」
2014年にデビュー。そこから頂点に立つまでには７年の月日を要したが「最初から勝てたわけではなかったので、勝つことの苦労も勝ってからの苦労も経験することができました」と振り返る。

■頂点の先に見えた、次のステージ

ガールズケイリンの頂点に立ってからわずか４ヶ月の2022年４月、電撃的に引退を発表した。
「1番になるまで辞めないと決めていました。そのあとは、もう一回頂点を目指したい気持ちと新しいことへの挑戦を天秤にかけて、本気でやりたいと思う方に行くことに決めました。公営競技でお客さんのお金が賭けられているので、半端な気持ちで走ってはいけないと思いもありました」

頂点に立ってからの日々は、毎日涙が止まらないほどだった。他に目指したいこと、できることも見えず、苦しい葛藤の日々だった。
そんな時、思い浮かんだのが、犬猫の保護活動だ。小学６年時から里親募集を通じて迎えた愛犬を飼っていたこともあり、犬猫の保護活動には興味があった。現役時代は競技に精いっぱいで何もできない状態が辛く、情報を遠ざけていた。また、引退したとしても、どうしていけばいいかわからなかった。持続可能でなければ、お金が回らなくなってしまえば、保護した犬猫たちが再び路頭に迷ってしまうからだ。

練習にもレースにも身が入らない中で手を差し伸べてくれたのが、デビュー2年目から指導を買って出てくれていた高木隆弘選手だった（姓は同じだが親戚関係ではない）。
「こういう施設があるよ」と事例を出してくれたのが、犬猫の保護活動と福祉施設の運営を結びつける現在の形だ。その話を聞いた夜からさっそく動き出し、現役引退と、その後の転身を決めた。
「きれいごとだけでは続かない世界。保護した命を守り続けるには、お金を“回せる仕組み”が必要です。だから私は、保護活動をボランティアにしないと決めています」

■3つの柱で築く、新しい生き方

現在は競輪の解説やイベント出演と並行し、犬猫の保護活動、自立支援型ホームの運営の３つを柱として日々を過ごす。競輪場で保護犬・保護猫活動のブースを開いたり、施設では障害のある利

用者と保護犬がともに生活し散歩や世話を通じて自立を目指したり、「2つ以上の分野にプラスがあるように」と積極的に“コラボ”を仕掛けている。

犬猫の保護と自立支援型ホームの組み合わせではこんな事例もあった。

「例えば、駅までの道を覚えるのが不安で外出をためらっていた方が、犬の散歩をきっかけに外へ出られるようになったこともあります。“自分のため”だと難しくても、“この子のため”なら頑張れる。動物の力って本当に大きいんです」

競輪選手時代は「1番になること」を目指し突き進んでいたが今は違う。

「今は“1番じゃなくていい”がテーマです。誰かと競う世界ではないのではないので、みんなが楽しければいいという感覚。利用者さんが笑ってくれたり、ワンちゃんの家族が決まったり、今はそうしたことに一番幸せを感じます」

一方で競輪選手としての経験も、今の活動を支えている。

「正直、選手の時の緊張感に比べたら今は何があっても大丈夫だと思えるんです。常に賞金ランキングに追われる感覚などを経験したからこそ、心の耐久力はつきました」

一方で、やりすぎたとも振り返る。

「競輪、競輪、競輪…と集中しすぎてしまった。1つのことを極めるのは得意なのかもしれないけど長く続かなかった。だから今は、あえて複数の軸を持っています。何かに行き詰まったら、別のことを考えるようにして、少し離れることで良いアイデアが浮かぶこともあります」

現在の目標は、保護犬・保護猫をゼロにすること。そして、30代のうちに新たな施設を作ることだ。そのためには貯金も勉強も大切。ドッグトレーニングを学び、それを障害のある人の就労支援につなげたいという構想もある。

「誰かを噛んでしまうような人に慣れていない犬も、逆に人が大好きな犬も、どんな子にも生きていける場所は必ずある。その場所をひとつでも多く作りたい。その過程を仕事にできたら、犬にも人にもプラスになるのかなと思います」

競輪で培った“極める力”を、今は社会に還元している。

■現役アスリートへのメッセージ「心の方向性を尊重した選択を」

最後に現役アスリートへのメッセージをお願いした。

「アスリートの可能性は、本当に大きい。競技に全力で向き合った経験は、必ず次の人生で武器になります。あと思うのは “（選手を）続けること”だけが正解じゃない。やりたいと思えることが見つかったなら、勇気を持って動いていい。一番にならなくてもいい世界もあるし、勝ち負けのない幸せもあります。自分の心がちゃんと動く方向を、大事にしてほしいなと思います」

すべてを競技に注ぎ込んだ日々があったからこそ、現在の高木さんは幅広い視野を持ち、人間も動物も命あるすべてのものが心身ともに豊かになれるよう、走り続けている。

「出逢いに感謝」を重ね故郷・愛媛県の食を提供する



岩村 敬士 氏（元野球選手）
Iwamura Takashi

これまでのキャリア

●1975 年　愛媛県宇和島市に生まれる
●1993 年　愛媛県立宇和島東高校 3 年時に春夏連続甲子園出場
●1996 年　日本体育大中退後、近鉄バファローズの入団テストに合格。ドラフト 7 位指名を受けプロ野球選手となる
●2000 年 プロ入り 2 年で戦力外通告を受け現役を引退。愛媛県今治市内で 2 年間就業後、故郷に戻り水産養殖関連会社の営業職へ
●2005 年　独立し地元の鰤や鯛など鮮魚を販売する「有限会社アクアプラス」を創設
●2008 年　海鮮・相撲茶屋「うわじま場所」1 号店を宇和島市内で開店。飲食業に進出
●2010 年　宇和島グルメを提供する回転寿司「すしえもん」を展開
●現在　　10 店舗以上を関東地区から九州地区まで展開する傍ら、愛媛飲食「GAINA 会」会長として愛媛の美食を広めていく活動に勤しむ

■今につながる「高校野球」での教え

「3〜4 歳の時にはもうバットとグローブを持っていた」と語る岩村さん。小学校４年生でソフトボールをはじめると、ほどなくして野球へ転向。宇和島市立城東中での活躍が認められ、高校は名将・上甲正典監督が率いる宇和島東高校へと進んだ。

当時は「お金を払っても二度とやりたくない」と思うほど厳しい練習の日々。ただ、今になってみると、指導者としての取り組み方の凄さがわかると岩村さん自身も振り返るように、そこには様々な意図が含まれていた。

大人になって監督と普通に会話した時、上甲監督はしきりにこう言うんです。『高校 1 年から 3 年の間は指導の仕方で人間が変わるんだ。』と。今の店舗で働く高校生のアルバイトも徹底して指導すれば成長すると思うんです。僕はその可能性を信じたいし、信じています」

実は岩村さん自身も人間性を変えてもらった側だった。高校入学当初はやや引っ込み思案だった性格は、最後には堂々と自己主張ができるようになった。小学校時代から務めていた捕手に加え、内野手、外野手と様々な守備位置も経験し、3 年時には主軸として春夏連続甲子園出場を達成。夏初戦では 4 打数 4 安打を放つなどプロ注目の選手の 1 人となった。

■運命を変えた再挑戦

だが、岩村さんは周囲に高卒でプロに行きたいという意思を伝えきれず、最終的には大学進学を選択する。
後悔を抱えたまま、大学野球生活は 1 年足らずでピリオドを打つことになった。
1995 年は人知れずプロテストを受験し、複数球団で最終候補に残るも大学を中退していたためすぐのプロ入りは叶わなかった。ここで夢を諦めた岩村さんは、地元でフリーター生活の日々を過ごす。一方で、そんな岩村さんの行方を捜す人がいた。近鉄バファローズのスカウトである。
「上甲監督を通じて、僕のためにプロテストをしてくれる連絡をもらったんです。当時は全く動いていなかったので、1 ヶ月ほど練習してから藤井寺球場で受験したら絶好調。気持ちよくホームランも打って合格です」
1996 年に 3 歳下の弟・明憲さん（元ヤクルトスワローズ・MLB レイズ、2 大会連続 WBC 日本代表）と共にドラフト指名を受け、ついに夢見ていたプロ野球の世界へ。しかしその歯車は、1 つの些細な認識の違いから大きく狂ってしまう。

当時、すでに家庭を持っていたため選手寮入りを免除されていた岩村さん。二軍のオープン戦では状態もよく、一軍昇格も視野に入る中、二軍ヘッドコーチから寮内にある室内練習場での夜間練習参加を薦められる。
「僕は寮に入っている選手だけが参加すると思っていたんです」

突如、試合起用が減った岩村さん。そこで二軍監督に確認すると、夜間練習の参加は「義務」だと知らされる。練習に参加していないことから試合起用が減ったことに慌てて夜間練習に参加するも後の祭りだった。
「打ったり投げたりには自信がありました。でも結局、試合に使ってもらえないことには何もできない。そうこうするうちに1年目が終わりました」
さらに2年目は、キャンプ2週目の「一軍キャンプ合流が決まっていた矢先だったんです」というタイミングで野球人生初の肉離れ。その後も度重なるケガに見舞われ、自分の野球に対する気持ちもかみ合わないまま、1998年秋に戦力外通告を受けた。
ヒジのケガもあって諦めはついていたとはいえ、コーチにお礼のあいさつをした時は自分でもびっくりするくらい涙があふれました」

それは同時に、野球との決別の涙でもあった。

■出逢いに導かれた第二のキャリア

物事を客観的に考え、フレームを大きくし「出逢いに感謝」で成功へ
現役引退後は、愛媛県今治市内で2年間パチンコ店の住み込み店員として働いた後、再び地元・宇和島に帰還した岩村さん。今度はいちから職を探し水産養殖会社に就職すると、2005年には「自分がおいしいと思ったものを提供したい」という思いから独立した。それから20年余りが経過した現在、岩村さんは様々な店舗業態を展開し、いまや愛媛の食を人々に楽しんでもらう伝道師的立場にある。

岩村さんが経営する店舗内にはこんなフレーズがある。
「出逢いに感謝」

「世の中にはタイミングと出逢いというものがある。自分がやりたいだけでは成功しないと思います」
野球の世界で時に痛みを伴いながら、様々なタイミングと出逢いを会得してきた。さらに自問自答しながらあらゆる状況を考察してきた岩村さんならではの金言だ。

■現役アスリートへのメッセージ「成功の鍵は“感謝”と“相手を察する力”」

このように多様な経験を成功の糧にしてきた岩村さんが、現役アスリートへ送るメッセージとは。
「相手の求めていることを察知することが大切です。自分が求められる人間になりたいのであれば、その場所の全員が求めていることを自分のやりたいことに変える。そしてもう1つ、恩を受けた人々にしっかり向き合い、どうやって感謝の気持ちを持ってお返しをするか。それが追究できた

ら成功すると思います。僕はメジャーリーガーになった弟、地元で信頼を築いてきた両親がいたので、裏切りたくない想いが強かった。苦しい時はそんな人々のことを思い出して留まることが大事です」

こうして愛媛県宇和島市を発祥に、松山市や県外での店舗で「求められている人々」に囲まれる日々を過ごしている岩村さんへ最後に将来の夢について聞いた。
「今、僕を求めている人たちを絶対に裏切りたくない。求められているところに求められているものを作りたい。僕を信じてついてきてくれた店長や幹部が、歳を重ねてみんなで『ありがとう』と言いあえる仲間でありたいですね」

業態を開拓してくれた先駆者に感謝し、支えてくれる仲間に感謝し「来てくれたお客さんを楽しませる」というコンセプトを貫く岩村さんの信頼をつなぐ旅は、これからも続いていく。

プロ野球選手から「プロ野球を伝える側へ」



加藤 翔平 氏（元野球選手）
Kato Shohei

これまでのキャリア

●1991 年　埼玉県加須市に生まれる
●2012 年　上武大学で才能が開花しドラフト 4 位でロッテに入団
●2013 年　史上 2 人目の新人でのプロ初打席初本塁打を放つ
●2021 年　シーズン途中で中日にトレード移籍
●2024 年 現役引退
●現在　報知新聞社（スポーツ報知）巨人担当記者

■グラブとバットからペンに持ち替えて

球場で練習を見つめる一人の記者。かつて 12 年間、プロ野球の世界でプレーした加藤翔平さんは、いまペンを手にグラウンドに立っている。

ロッテ、中日で外野手としてプレーし平均勤続年数を大きく上回る 12 年のキャリアを経て、2025 年からスポーツ報知の記者として新たな一歩を踏み出した。

「待っている時間、長いなって最初は思いました」

現役時代とは正反対の立場。だが、その“待つ時間”の意味を加藤さんはすぐに理解する。

「準備がないと、いい話は聞けない。野球と同じで、相手の情報をどれだけ持っているかが大事なんです」

2 年目の今年は自ら希望し、巨人のファーム担当に。1 軍の結果だけでなく、選手たちの“プロセス”を伝えたいという思いがある。

「1 軍で打った、打てなかっただけじゃなくて、ファームでどんな取り組みをしてきたのか。その過程を伝えることで、選手の価値ももっと伝わると思うんです」。

■「才能はある」その一言が人生を変えた

高校時代、プロはまったく意識していなかった。中学までは無名の存在でスポーツ推薦の話もなく、進学校である埼玉県立春日部東高校へ進学した。

だがそこで力をつけて、進学した上武大学で転機が訪れる。「正直に言えば、絶対に戻りたくない 4 年間」と語るほど厳しい鍛錬を積んだ時期だったが、ここで才能を開花させていった。

左の強打者として社会人野球で活躍した谷口英規監督に下級生時代から起用してもらい、

大学 3 年になる直前からコーチに就任した平原美亜さんに見出され、マンツーマンでの練習に励んだ。

「お前は能力があるのに活かせていない。練習のやり方を考えろ。プロになれる能力があるよ。ここからの頑張り次第だ」

こうした言葉に奮い立ち、自主練習は夜遅くまで続けた。その結果、ロッテにドラフト指名を受けて、数年前からは考えられない夢舞台に立った。

■出逢いに導かれた第二のキャリア

物事を客観的に考え、フレームを大きくし「出逢いに感謝」で成功へ

現役引退後は、愛媛県今治市内で 2 年間パチンコ店の住み込み店員として働いた後、再び地元・宇和島に帰還した岩村さん。今度はいちから職を探し水産養殖会社に就職すると、2005 年には「自分がおいしいと思ったものを提供したい」という思いから独立した。それから 20 年余りが経過した現在、岩村さんは様々な店舗業態を展開し、いまや愛媛の食を人々に楽しんでもらう伝道師的立場にある。

岩村さんが経営する店舗内にはこんなフレーズがある。

「出逢いに感謝」

「世の中にはタイミングと出逢いというものがある。自分がやりたいだけでは成功しないと思います」

野球の世界で時に痛みを伴いながら、様々なタイミングと出逢いを会得してきた。さらに自問自答しながらあらゆる状況を考察してきた岩村さんならではの金言だ。

■鮮烈なデビューの裏で

プロデビューは鮮烈だった。ルーキーイヤーの初打席で初本塁打。新人選手としては史上２人目の快挙だった。だが、厳しい世界だ。そこからは「どうやったらこの世界で生き残れるか。それを12年間考え続けました」という日々だった。

「本当にもう毎日毎日、結果がすべての世界ですし。やっぱりいくらバットを振ったり考えたりしても、結果に直結する世界ではないので、もう本当に１日１日がプレッシャーとの戦いでした」

ロッテ時代の後半は、二軍で結果を出しても出場機会に恵まれず、野球を嫌いになりかけた時期もあった。環境を変えたいと思い、自らトレードを志願して中日へトレード移籍。そこで再び野球の楽しさを思い出した。

「最後は、野球やっていてよかったなと思って終われました。それが本当に大きかったです」

走力の衰えを感じた瞬間、自ら引退を決意した。

■野球を伝える側として歩み出す

引退後、球団に残る道もあった。それでも加藤さんは、あえて異なる世界に挑戦した。

中学時代、主力ではなかったからこそ抱いていた「スポーツメディアに関わりたい」という原点に立ち返った。「好きなことをしないと続かないよ」という妻の言葉も背中を押した。

元選手という立場は強みでもあり、難しさでもある。

「知ったかぶりは絶対にしたくない。選手一人ひとりに思いがある。そこを大事にしたい」

信頼関係が築けたとき、選手がふと本音をこぼす瞬間がある。その瞬間にやりがいを感じるという。また、スタンドの記者席から試合を眺める中で「こんな応援の中でプレーしていたんだなと感じます。プロ野球は本当に夢のある世界です」と、あらためて感謝の気持ちが湧いたという。

いまは巨人担当として現場に立つ。「この選手のこういう記事を書きたい、と自分から提案できる記者になりたい。いろんな野球を見て、いろんな物語を届けたいです」と、大きなやりがいを持って仕事に励んでいる。

■現役アスリートへのメッセージ「やりがいを見つけることが続ける力になる」

現役選手に対してメッセージを求めると、「野球だけで生きられる人は一握り。でも、野球に本気で向き合った経験は必ず次に生きます」と力強く語る。

もちろん、この世界も決して簡単ではない。覚えることは多く、思うようにいかない日もある。それでも「自分なりのやりがいを見つけることが大事。僕も最初はきついなと思うこともありました。でも“この記事を書けてよかった”と思える瞬間が増えて、仕事が楽しくなりました」と話

す。そして、もう一度人生をやり直しても野球を選ぶと、即答した。
「野球を嫌いにならずに終われた。それが今につながっています」
グラウンドに立つ立場は変わった加藤さんだが、野球への情熱は変わらない。

たくさんの人との出会いや海外での経験を活かした「専門コーチ」に





君島 良夫 氏（元ラグビー選手）
Kimishima Yoshio

これまでのキャリア

●1984 年　茨城県水戸市に生まれる
●1999 年　高校入学と同時にサッカーからラグビーへ転向
●2007 年　同志社大の全国 4 強に貢献し NTT 東日本に入社
●2009 年　NTT コミュニケーションズ（現浦安 D-Rocks）に移管されたチームでトップリーグ昇格
●2014 年 チームから戦力外通告を受けてオーストラリアへ。その後アメリカでもプレー
●2017 年　2 年間プレーした日野自動車レッドドルフィンズを退団し第一線から退く
●現在　キック専門コーチとして『Japan Elite Kicking（ジャパン・エリート・キッキング）』を設立

■サッカーが生んだ「キックの専門性」

ラン、パス、タックルなど、様々なプレーから構成されるラグビー。その中でも、正式名称が「ラグビーフットボール」であることからもわかるように、キックは勝敗を握る重要な要素であり、ルール改正などもあってその比重はどんどんと増している。

一方でキックを任される選手はチームの中で数名。それゆえか日本では「スクラムコーチ」は一

般的でも、「キックコーチ」はいないことが当たり前だった。そんな従来の固定概念を壊し、「キックコーチ」として総勢200チーム、3,000名以上のコーチングを行ってきたのが君島良夫さんだ。

幼き日の夢はＪリーガー。1984年生まれの君島良夫さんにとって、93年に開幕したＪリーグに心を奪われるのも無理はない。私立清真学園中学校に入学したのも「隣に鹿島アントラーズの練習場があったから」。サッカーのために3ヶ月間ブラジルへの留学までした。

だが高校年代の鹿島アントラーズユースのセレクションに落選。高校にもサッカー部がなかった。

そんな時に声をかけられたのがラグビー部だった。「キックを生かせるかも」と思ったことに加えて、全国高校ラグビーフットボール大会（通称・花園）での先輩たちの勇姿を見て「メチャクチャかっこいい」と転向を決めた。

■戦力外を「進化」に変え、舞台は海外へ

司令塔の役割を担うスタンドオフとして活躍。サッカーを下地にしたキックも有効に使うことができた。高校2年、3年と花園に出場し、同志社大学でも4年時にベスト4に進出。

2007年からはNTT東日本でプレー。「大学がハードすぎて燃え尽きているところもあったので、ラグビーで入社ができる大きな会社」というのが理由だった。しかしグループの再編もあって、NTTコミュニケーションズ（現浦安D-Rocks）に移管され、チームは強化に転じた。社業の負担も減り、そこで再び火がつき、3年目にはトップリーグ昇格を果たした。

入社から30歳までの7年間は社員選手でチームの中心として活躍していたが、30歳で突然、戦力外通告を受ける。「送別会の幹事をやろうとしていたら自分が送られる側になってしまいました」というほど予想外だった。

ショックはあったが、すぐに「新しいチャレンジをしよう。国内じゃなくて海外でプレーするなら今だ」と思い立ち、オーストラリアへ行くことにした。

■「キック専門コーチ」という新たな扉

そこで出会ったのが、キック専門のコーチの存在だ。チームに週2、3回来ており、そのセッションが刺激的だった。これまでサッカーの延長戦で独学だったものに、様々な発見をもたらしてくれた。

この原体験が今につながっていく。

アメリカでもプレーした後に帰国。日野自動車レッドドルフィンズで3年間プレーし、2017年をもって競技の第一線から退いた。ラグビー後進国のアメリカや、チーム内でベテランとなっていた日野自動車では若い選手などに指導する場面が多々あった。

また、最後の３年間は社業の無いプロ選手だったこともあり、空いた時間にキックの指導をしたいと思った。そこで、かつてのチームメイトである早稲田大の山下大悟監督（当時）にその旨を伝えると許可をもらい、キックコーチとしてのキャリアが始まった。

その時に１年生だったのが齋藤直人（現スタッド・トゥールーザン※フランス）、岸岡智樹（現クボタスピアーズ船橋・東京ベイ）。指導した彼らの活躍によって、君島さんの存在がメディアに取り上げられ知名度も高まった。

そこから他チームからのオファーが舞い込むようになり『Japan Elite Kicking（ジャパン・エリート・キッキング）』を設立。今ではチーム、個人、オンライン（コロナ禍から開始）でレッスンを行い、受講するのはプロ選手から子どもまで幅広く、レベルやチームの強さも様々。指導陣にはトップカテゴリーで活躍した元選手たちも複数参画している。

指導で心がけているのは「一番良いところを見つける」ということだ。
「キックを見た時に、悪いところを指摘しがちなんですけど、これだと信頼関係を作れない。毎日一緒に過ごしている人だったらいいんですけど、下手したら一生に１回しか会わない人もいるので、その人の“これを伸ばしていこう”というところからスタート。向こうから何か改善点を聞かれたり、もっと良くしたいって意欲が見えたりした時に思っていることを伝えていくようにしています」

キックは試合の流れを左右する重要な要素でありながら、専門的に学ぶ機会は多くない。自身の経験を体系化し、伝えることに大きな意義を感じている。

■現役アスリートへのメッセージ「新たな出会いの価値」

現役選手に対してメッセージを求めると、競技とは異なる世界の人と触れ合うことの大切さを説く。
「やっていてよかったことはすごく明確で、いろんな人と会ったことです。中には否定的な人もいると思うのですが、仕事して、練習して、夜から飲みに行って、まったく違う世界の人と交流しました。見方によっては夜遊びなんですけど、そこで出会った人からいい影響を受けたりすることは少なからずありました」
それは、中学時代にブラジル、ラグビー選手としてオーストラリアやアメリカに行った事と同じく、立場や価値観が違う人との出会いが自身の糧になる。もし、日本の中のみで競技の世界のみで生きていたら「キック専門のコーチ」の存在すら知ることはなかったはずだ。

全国各地に足を運ぶ充実した日々を送る君島さん。果敢にチャレンジしていく姿勢は現役時代も今も変わらない。